
困った時の神頼み!!

平井純謫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

困った時の神頼み！！

【Zコード】

Z0850T

【作者名】

平井純鷗

【あらすじ】

科学の発展ですっかり廃れてしまった山海神社を舞台に繰り広げられるちょっと不思議な神様ファンタジー。

元気いっぱいで常にポジティブな双子の姉「雨螺」と知識オタクで冷静沈着な妹「鎌螺」、そして信仰心が薄れて弱体化した土地神「夢寐」。この御三方が貧乏に負けずに日々戦い続ける。

正体不明の探偵「アイスバーン」の暗躍に世界が傾き始める。

せつめつ（繪畫也）

編集し直しました。

わざわざひらひら不思議なお話でござります。

はじめ

睡眠…多忙な現代人にとっては最も安息の時間である。

眠いから授業中に惰眠を貪つているのも身体に必要不可欠な存在であるから教師達も注意するのを躊躇うのも致し方ないのである。

しかし、何故生き物全般に睡眠という機能が備わっているのかは専門家中でも意見が分かれしており明確な答えが導けていないのが現状だ。

質の良い睡眠は集中力が倍増し好奇心が旺盛になるがあまり好ましくない睡眠を数日続けてしまえば様々な悪影響が出るのも周知の事実である。

「…」ここまで我々の健康の要としている睡眠の正体とは何のであるうか…

歴史上の知識人達は、睡眠という事柄においては顕著な程に重点を置いていた。

よく難関大学を狙う受験生が寝る数分前に英単語や数学の公式を覚えるために見ていくと言つたことがあった。

知識重視社会や人間らしい人間になるためにも睡眠と人間は、切つても切れない関係があることがわかる。

さてここからこの物語の主題だ…

もしである…もしもその答えを一つだけ定義することを了承して頂けるのなら設けておきたいと思う。

それには「神」というなんとも面妖な言葉で表現されてしまい知識人に多大な混乱を招いてしまうかもしぬないが目を瞑つて欲しい。ここでの定義とは…

神は現世における様々な心配事の償いとして、我々に希望と睡眠を与えた。

つまり睡眠を神の御業として定義した後に話を進めていきたいと思つております。

何気なく漫然と日常生活を営んでいる方々に普段とは違つた別の切り口で世界が見渡せる事を願つてここに伝承を記す。

旅伝道師 ヤトノ

「夢寐神伝聞録 第一章」より引用。

* * * * *

神社の境内の中で小さな女の子が地面に絵を描きながら元氣な声で歌つていた。

地面に描かれているのは本人が好んで観ていいる児童アニメのようであるが、まだ絵を描くという作業に慣れていないらしく目玉が変に誇張されて目玉オヤジにしか見えない程だった。

時刻は夕暮れに成り始めた所で夕陽のオレンジ色が一直線に障害物を避けて通り過ぎていく。

すると一人のクルツとした猫毛をした女性が神社の石段を登つてきた。

格好は、本当に近所まで買い物に行くかのように白いエプロン姿で草履を履いていた。

女性は、中々の運動量となる石段を登り終わった後に呼吸を整えてから。

「はあ…はあ…もう、こんな所にいたのね!…いつも言つてるでしょ!

!五時の合図が鳴る前に家に帰る事つて…」

女性の言つて居る五時の合図とは、毎日午後五時になると学生の交通事故を防ぐ為の注意喚起として町内に流れる音楽のことであつた。

曲は「夕焼けこやけ」。

「あつ！おかーさん！」

小さい女の子が嬉しそうに笑顔を女性に向けてトテトテと走り寄つて女性の足元に抱きついた。

「 もへ、心配したんだからね！ ！ こんな事、一度としちゃダメよ。」

「『Jみんなで』……」

母親の注意に少しだけバツが悪そうに顔を下に向ける女の子。でも両手は、しっかりと母親のエプロンを握りしめる。
全く…といった感じで女の子の頭をグリグリと撫で回すと娘は、
にぱりと顔を上げて甘える。

女性は娘が見つかった事に安堵したらしく、今いる場所の見渡しだ。

「ここは……随分懐かしいわね！あたしも子供の時によく遊びに来たわ！！」

悠久の時の流れをまるで塞き止めているかのように神社の社が鎮座しているのに感動する。

（そういうえば…久しぶりに来たわ…ちょっとお参りしてこいつかしら…）

普段から小銭を入れたがま口財布を持ち歩いていることを思い出した女性は、ジーンズのポケットからスッと取り出した。ちょっとした支出に対応出来るように携帯している財布なので一円～百円までの硬貨が無造作に散らばっている。

「それじゃ！遅くまで見守つてくれた神様にお礼をしないとね！！」

「かむわせぬ～？」

女の子は、首を傾げて普段の生活では聞かれない言葉を一つずつ返しのよつけで聞き返した。

「そう……」この夜刀ノ町の平和を守つて下さる偉い神様よ！」

「ふん！」

あまりピンと来ない顔だが「とにかく凄い！」「ことが伝わったのか眼をキラキラと輝かせて見上げる。

古ぼけた神社の本殿である社の前に移動し、財布から十円玉を取り出して娘にしゃがんで手渡した。

まだ小さな小さな手の平であるが宝物のように両手に掴んで眺める。

「じゃあ！頑張つて目の前にある箱の中に入れてみよつかー！」

「うん！」

お参りに来た時に賽銭を入れる箱というのは、盜難防止かよく分からぬが柵的な物に阻まれてゐる為、大人でも偶に外してしまうくらい難易度が高い。

ましてや賽銭箱の前にある柵と同等の身長である女の子には、一発で入れるのは難しいというより不可能に近いことだつた。

なんせ目標地点である賽銭入口が見えない（全体も）為、ほぼ勘で入れるしかない。

「よし……えい！」

小さく振りかぶつて十円玉を賽銭箱にかけて入れようとするが……やはり、予想した通りにカツパー色の硬貨は、賽銭箱から検討外の場所に落ちてしまった。

「あら……やっぱり難しいわよね……そんなに落ち込まなくて良いわよ！ わざとじやないから神様も許してくれるわよ」

外したことを気にしながら母親の顔を心配そうに向ける娘。

まあ、神主が入れ損じた賽銭を拾ってくれる情景が容易に想像でききたので上記の表情を浮かべる娘に笑みを返す。

しかし、子供的好奇心はちょくちょく変化するモノで母親が笑顔を返す時には、上にぶら下がっている鈴に興味が注がれていた。

おそらく母親の顔を見る時に視界に入つたのであろう。

何もかもが新鮮で厳かな雰囲気漂う神社の中では、誰もが童心に帰つたかのような感情になる。
緩く暖かい場所であつた。

それほど神社でのマナーに詳しい訳ではないので鈴を二、三回力ランカラんと鳴らしてから手を合わせる。

「ねえ……おかーさん？」

「どうしたの？」

「…(イ)の神様ってどんなかみわも…？」

「…夢寐神様よ…人々の睡眠を守つてくれる神様！」

「すいみん……？」

「夜になつたらお休みなさいするでしょ…その時に楽しい夢を見させてくれる神様よ」

「たのしいゆめ……？わたし、おそらく飛んでる夢がみたいな…！」

「じゃあ…よつべお願いするのよ…良い子にしていれば夢寐神様がきっと見せてくれるわー！」

無事にお参りを終えると娘の手を引いて女性が神社の鳥居をくぐつて石段を降りようと足を進める。

娘は、不意に振り返つて神社の社にバイバイと手を振つてから帰つて行つた。

この時に娘が手を振つた先で髪が少しだけ長く真っ白な髪をした少年が賽銭箱の上で手を振り返していたことに母親は気付くことはなかつた。

妙に切れ長の眼と藍色の袴を身に付けた少年だった。

デイズ1 神様つて（前書き）

最近、柔軟体操を始めました。

簡単に関節が外れてしまつので氣を使います。

デイズ1 神様つて

ねえ……知ってる?

神様がいることを証明するにはね……絶対的で完全なるモノの存在を証明すれば良いんだよ。

でも、絶対的なモノつて何だろ?う?

書物は虫に食われちゃうし、タンスも家も時間が経てば壊れてしまうう……

人間だって何時かは歳老いて死んじゃうんだよ……

あれ……?

絶対的なモノつてないよね……

神様つて本当はいないのかな?

* * * * *

コンビニのアルバイトを終えて帰路に着いたのは午後8時を過ぎた辺りだった。今日も一仕事終えて鼻歌混じりで商品の余り物（戦果）を誇らしげに眺める。

「よし……今日の夕食は中身が意外においしい包装おにぎりだわ!」

!

帰つて家族と食べる様子をシミュレーションする。真ん中から裂いて海苔が破れないように優しく左右に引っ張り解放する。

「やっぱ人間は食う物食わんとやつてけないわね……ただできえ不況なんだから明日を生きるためにも!…」

グッと手を上に上げて三日月を掴もうとする。霞がかかった薄ぼやけた三日月だ。その動作をしていると街灯のある所に出て乱雑に切り揃えられた黒色のショートカットが薄く光った。

* * * * *

ショートカットの女性が我が家であるアパートの一階にある一室へ向かって階段をリズミカルに昇り、「204」と表記された扉をくぐる。

決してお世辞にも新築で良い部屋とは言えないが何とか住めるようなアパート。

アパート「キリカスミ」……築30年。間取りといつ立派な仕切りはなく「台所と畳6枚分の間がある」という一間だけである。

トイレとお風呂は共同。

それで家賃は月々3万円と得なのか損なのか分からぬ所である。でも家賃の支払いは待ってくれるので良いのかもしれない。

「ただいま」 ショートカットの女性が部屋で寬いでいるであろう家族に向けて言った。

「お帰り……雨螺……」

「コンビニの仕事、大変だつたけどきつちり給料貰つてきたわよ……あとは今月分の賛錢の計算して来月の予定を立てるわよ……」

レジ袋の中身をちぢやぶ台の前にガサガサと陳列させる。

「うん……その」と何だけど……これを見て」

「いきなりね……何なに？」新聞の三面記事を開いてとある話題の所をスッと指したのでそこを注視する。

そこにはあまり大きな話題とはなっていないが申し訳程度に衝撃的な事柄が掲載されていた。

→サイエンスニュース→
神様はいなかつた！？

全世界に警鐘を鳴らす眞実

スウェーテンの王立科学アカデミーが驚くべき理論を今用の16日に明らかにした。僅かミクロサイズの物質が神の定説を覆したのだ。不確定性原理の正しさが証明されたことによる社会への影響が懸念される。

「な！？なんですか！」

舌わたシミートがマトガ更に舌わる
れてしまつたことに動搖したようだ。

しかし今はそんなことを気にする余裕はなく焦った眼で隣にいる口

「えつ……も、もももしかして……賽銭は」

冷や汗をたらたらに出しながら感る感る。

なりピンチ

300円ですと！！！

待て待てよー！受験シーズンで合格祈願や絵馬の売上が結構あつたから暫くそれで暮らせるけど……この先のことを考えると……なんてことをしてくれんのよ科学者めー！

「バイトの時間を増やさないと……かなり深刻よ…」

「私もアルバイトの時間を増やす……」

と一人でピンチを乗り切ろうとしている一人の女性の足下にヒタヒタと這いずり回る白く奇妙な物体が動いていた。やがてその物体はおもむろにちやぶ台の脚から器用にスルスルと上に登る。

「なんだよーまたコンビニのおにぎりかよ……たまには豪勢にステーキが食べたいぞーー肉を出せ肉をー！」

その白い物体は体長1m程の青大将であった。しかも今日の晩飯にケチをつけたと尾を返してちやぶ台から一コロんと下に頭を垂れる。

するとすかさずショートカットの女性が青大将の首根っこをガシツと掴んだ。年頃の娘さんにはとても出来ない芸当である。そのまま問題の記事に青大将をこれでもかと言わんばかり見せ付ける。

「何しやがん……ん!？」

暫くの間、読むために時間を割くとショートカットの女性から解放された青大将は、ドーナツ形のクッショーンにじぐろを巻いて議論する体勢へと移行する。

「どうこいつよー！夢寐むび！？アンタは、こんな姿でも一応神様でしょー…でも存在しているから科学者が間違っているってことないのかしら？」

今話したショートカットの女性は「山海兩螺せんがいあまね」。17歳で近くにある神社の経営をしている双子の姉妹の姉である。

「でも詳しく述べ不確定性原理を調べてみたり……客観的に正しい……」

「Jのロングヘアの女性は「せんがい かまら山海鎌螺」。姉と同じく17歳。双子の妹。

二人の姉妹の言い分を聴いた所で夢寐は、ゆっくりと天井を一回見てから疑問を投げかける。

「お前らさ……神様がどんなもんだと思つてんだ？」

「えつーー？」あまりにも予想外の質問に思わずたじろぐ雨螺。

「Jの新聞が報道していることを端的に言つとな……ハハ全知全能の神がいないくくといふ事をだぞ……」

「？」「首を傾げる雨螺だが隣いた鎌螺は、理解したよつて手をポンと叩いた。

「鎌だけわかつたみたいだが……雨は理解出来てねーみたいだな……それでも日本人がよ」

「雨螺はそういう論理的な話に慣れてない……」

いち早く理解した鎌螺は、何故か土くれで出来た染みだらけの壁に向けて倒立をし始める。

「もうーーー一人して人をバカにしてーーもっとわかりやすく言ひなさいよーーー！」

理解が遅い経理担当の雨螺が田へじらを立てて怒る。紹介が遅

れたがこの偉そうに喋っている青大将は、双子の姉妹が管理している山海神社の御尊神「夢寐神」^{むびがみ}様である。しかし科学が発展してしまい神社に御参りに来る参拝客が減った為やさぐれている。現在は、信仰心が少なくなつて蛇の姿にまでランクが墮ちてしまった。自称「昔の俺は格好良かつた！！」と言つてゐるが定かでない。

「世界の宗教形態は大きく分けて一つに分けられることは知つてゐるか？」夢寐が言つた。

「えつー？ー一つ？」

「お前よくそれで俺の神社を経営していたな… 大きく分けて一つと耳の雨螺が驚きながら言つ。

「お前よくそれで俺の神社を経営していたな… 大きく分けて一つといつのはゝゝ多神教くくとゝゝ一神教くくだ」

多神教……日本やインドに見られる教え。様々なモノに神様がいると考えた結果神様の数が多くなつた。
日本の八百万^{やおよろず}の神等。

一神教……絶対的な能力を持つとされる一人の神を讃える教え。有名な所でキリスト教やユダヤ教等があるが定義が複雑で解釈が大変である。古代エジプトの王アメンホテプ4世が考案。

「今回の証明で大打撃を受けたのは一神教の方だ……端的に言つてしまえば「不得意な分野はありますけど神様います！！」という解釈でも正しいんだよ…」

「おおー！… そなんんだ」

夢寐の説明に納得した兩螺が感心カンシンと言わんばかりに夢寐

の三角の頭をナテナテした。

一〇二
一九三〇年五月

＊＊＊＊＊

大大大大大

雨螺が手に入ってきた賞味期限ストレスのおにぎりを「人と一柱が
包装紙を開けてモグモグと食べる。

「コンビニのアルバイトのメリットは、賞味期限が切れる寸前の食
品が貰えることである。

「ところで気になるのが、この『時代』誰が300円を賽銭してくれたのかしらね?」

雨螺がイクラと鮭の親子おにぎりを頬張りながら言った。

「誰だろーな……きつとかつこいい俺に惚れたファンだろ！？」

「いや、ないない」

器用に焼きタレのにおいをちやぶりの上に立てて食べる藝術に
雨螺が突っ込んだ。

「三十四の駄菓子屋のタリ子ばあちゃん（87歳）だよ…」

駄菓子屋のターニー……算盤で会計を計算しているが最近は、指の力と計算力が弱くなりお釣りが10円多く返つてくる名物駄菓子屋。よく考えると最近は100円に進化しているからもつとマズイかも。そろばん

「ああ……結構あの神掛かりのお釣り計算に何度もお世話になつたわね」

ちやつかり着服していた。

「俺が消滅しないでいられるのはタニ子婆さんのおかげか……でも87歳じゃ、そろそろあつちの世界に行つてしまはず……そしたら消滅、ヤバイな」

改めて具体的な数字が出てくると急に現実感が増したようである。

土地神は信仰心を存在のチカラとしているため人々の信仰心がなくなつてしまえば消滅してしまつ。

これは、土地神を生業とする神々にとつては共通のルールであり同時に神が人間を守るように出来た仕組みでもある。

「そうだね……このままだと私達は路頭に迷うし夢寐が消滅しちゃうからなんとかしないとね……」

「夢寐の信仰心を取り戻す……つまり私達も経済的に上を向く……手を打つべき」

でもなあ……神様がいるにはいるけど「全知全能じゃないけど頑張ります!!」と言いホイホイ参拝に来てくれるステキなシナップスを持つている人間がいるわけないため……考へては案が頓挫するの繰り返しだった。

「う～む……ダイレクトに不完全な神様を宣伝文句にしてもなんだかだし……」

雨螺が生氣のなくなつた夢寐神様を心配そうに見つめる。

「だ、大丈夫だから！私達がなんとかするわよ」

慌て付け足すように言った。

それでも夢寐の顔色は晴れない……消滅するかもしれないといつ瀬戸際に立たされているのだから当然といえば当然であろう。少しだけ沈黙が流れた後に夢寐が口を開く。

「消滅したらタニア婆さんと一緒に三途の川を渡るのか……もつ少し若い娘と一緒に逝きたいなあ……」

「へへへ……？」

夢寐のあまりに緊張感がなくなる発言に思わずすっとんきょうな声を上げてしまった。

どうやら彼が悩んでいたのは消滅後の世界で伴侶と同等となるタニア婆さんの世話をしながら川を渡るのが嫌だの」と。

「なんで消滅する」とが前提なのよ……もつと頑張りなさいよ……！」

「あのな……無理に決まってるだろうが……一度、神に不信感を抱いた人間が簡単に戻つてくるかよ……夢寐神は消滅だ」

ダメだ……すっかりやる気を失つてなげやりになつてゐるわ……でもまあ、少しだけど私には分かる。

今まで土地神として町を見守り続けたのに……今回の件で恩を仇で返されたようなもんだもんね。

「それに最近の氐子達を見てもそudsが人と繋がりが希薄になつ

てこる……もつ土地神は必要じやないのかね……」

「夢寐……そんなことない……私達をここまで育ててくれた……」

「鎌螺の言つ通りよ……両親がいない私達を見捨てないでくれたじゃない……まだ恩を返し終わつてないのに消滅なんて許さないから……！」

雨螺と鎌螺の両親は一人が生まれて間もなく交通事故に遭つて亡くなつてしましました。つまり夢寐神が彼女らの父親代わり。

夕食も終わりおにぎりの包装紙をコンビニの袋にまとめて入れる。その後の会話がほとんどなかつた。

雨螺は家計簿を付ける為黒の薄いフレームの眼鏡を掛けてパラパラと家計簿を開く。

しかし気持ちは今月の財政状況には向かず、夢寐の失われた信心をどのように取り戻すかということに向いていた。
(勢いで言つたけど……結構絶望的な状態よね……)

この場でもネックになるのが全知全能の神の不在を証明した不確定性原理だ。

これがある限り……信心を取り戻す手段が弱くなつてしまつ。明日から鎌螺に教えて貰いながら勉強しようかな……アイツってマニアックな所が詳しいから。果たして文系の私が理解できるかしら……？

どうすれば良いのだろ?……雨螺が家計簿の収入の欄に「賽銭 300円」と黒のボールペンで記入した。

デイズ2 案（前書き）

本日、久しぶりに本家や親戚の家に挨拶に行きました。

何処の家でも「どら焼」を茶菓子として出すのはなぜ？

デイズ2・案

山海神社が守護する街「夜刀ノ街」。

常陸國風土記に伝えられる、多くの蛇を従える蛇神の伝説がある。

そのおぞましい姿を見ただけで一族もろとも滅び、跡継ぎが絶えるとされ不吉の象徴。その祟りを鎮めるため何時しか不吉の象徴を祀るようになつた。

それが山海神社の始まりであり街名の由来でもある。

そんな由緒ある神社なのだが……

「くわあ～！！暇だわ」

雨螺が巫女姿で箒を手に取り大きく体を引き伸ばす。そこには、ガランとも寂しげの境内が暇そうに空間に鎮座していた。まさか、ここまでとは…改めて噂話の怖い面を見た感じだ。

山海神社：昔ながらの悠久の美を現代に伝える造り。しかし、現在は廃れ始めて境内は名も無き雑草達が逞しい生命力を發揮しているが肝心の社は、白蟻にでも喰われているのではないかと疑う程のボロボロ具合で立ち入り禁止である…無論、賽銭は大歓迎なのが…。

春先で数匹の蜘蛛が必死に家作りをしているのが癪にさわる。

本日は珍しくバイトが午前中休みの雨螺と鎌螺は、巫女姿で焼け石に水とは思つがやらないよりかマシとこうことで神社のもり立てをしていた。

「来ないな……」竹箒を片手に神社の守護を任している狛犬に凭れ

掛かり、一息入れる。

すると青大将の姿をしている夢寐が神社の狛犬の石象をヒヨイツと這い上がり巫女姿の雨螺に三角の頭を突き出す。

「うわっ！！」

一瞬、身体が仰天により地面から足が離れるが…すぐ様、足に地を着けて夢寐の三角頭を鑑みる。

「やつぱりだろ…」
「うことなんだよな…」
自分では口クに確かめもしない内に噂を信じるのが人間だ…もしかしたら自然淘汰の原則が働いて次にこの世から姿を消すのはゝゝ土地神くくかもな…」

スルスルと狛犬の石象から降りて、境内の中で死んでいたバッタに群がる蟻の集団を見ながら言つ。

すっかりネガティブモードに入ってしまったようだ。

「大丈夫だから…私達が何とかするから…！」

本来、何とかして貰う側の土地神がすっかり諦めモードに入つてしまつたので人間のアドバイスが活かせるか判らない。

夢寐は、無残に肉片と化すバッタの姿を自分の将来と重ね合わせて見ているようだった。

「そいいえば鎌螺はどうしたのかしら？」

箒を持ったまま辺りをキヨロキヨロと見渡すが鎌螺とおぼしき人物は見付からなかつた。いつもなら交代でアルバイトに行つたり神社の店番と言つたらおかしいが、神社の管理をしているのだが今日は珍しく一人共、アルバイトは午後からなので午前中は草むしりの

雑務が出来ている。

昔からの習慣で朝の通勤途中の会社員や朝練を実施している学生等も呼び込めるよつに山海家の朝は早く「5時位には神社の境内に立つ！」ことをモットーにしている。

アルバイトで急な仕事以外は夜は9時頃、就寝して早朝の4時半に目を覚ますといった具合だ。暗くなつたら寝るという狩猟民族や農民のような生活態度だが雨螺と鎌螺にはこの生活が合っているらしい。

「」のような生活ならば脳内の薬であり気持ちよい幸福感を与えてくれる「セロトニン」が分泌して……夜暗くなるにつれて眠くなる物質「メラトニン」が出るから快眠である……と変な雑学マニアの鎌螺が知識を披露するのだ。

さて話しあて雑学マニアで山海家の理系担当の鎌螺は何処へ？境内では、蛇影くらいしか見当たらず特徴的な黒く長い髪の鎌螺は見付からない。

階段でも掃いているのか？…

山海神社は、道路に面しているが道路から神社の全容が見えるわけではなく、少々階段を隔てあるため道路とは少しだけ標高が高い所に立地を構えている。

所々欠けていて怖いが石の鳥居（修復したいが予算がない）をくぐり抜けて階段下をヒヨイと覗きこんだ。（階段近くなら呼び込んで貰いたいわね……まずは近所の人々の交流が大事よ）と我が妹の仕事ぶりを観察するが……

「今なら3000円ぽっきり！」「

可愛い娘いますよ……的な看板を手に持つて宣伝している

巫女さんがあたかもいかがわしい商売をしているかのような妹がいて思わず力が抜ける。

そこへ、会社員風の男性が通りかかり巫女さんの眼が光る。

「社長さーん……どうですか！……山海神社へのお参りを田舎にしで気持ちよい朝を迎えませんか？……」

「すまないがこれから鹿児島まで単身赴任をしなければならんのだ……」

「そんなことを言わずに……旅の安全のこともありますし……5分とかかりませんよ」

「うちは急いでいるんだ！！話しかけないでくれ……いかん！もう、こんな時間だ！！せつかく新幹線の指定席を取ったのに無駄にしてしまつ……」

と会社員の男性は、左腕に着けたデジタル時計を見ながら早足で山海神社からそそくさと離れてしまった。

「ダメですな……心に余裕を持たないと……もつと可愛い娘を用意するべきか……（雨螺じや無理）……」

とキヤバレーの宣伝のような看板を杖代わりにして体重をかける。早朝そんなに人がいるわけでなく森閑とする街の一角を見渡した。

ガニッ！…鎌螺が竹箒のモシャモシャした部分で叩かれた。

「何しどんじや……鎌螺！誰がそんな呼び込みをしろと呟つた！！？」

？

どうやらボソリ声は、聴こえなかつたらしい。

不意の一撃にキヤバレーの宣伝看板が「トツー！」と木製の乾いた音が森閑としていた街をつんざいた。

「痛い…竹箒の先っぽで殴るな…眼に入つたらどうする？」

「アンタは本当に神社の再興を考えてるの？誰がバーの呼び込みをしろと言つたのよ！」

「失礼だな…考へているから」の結論に至つた…そうすれば人間の話題の種になる…」

どうやら鎌螺の策略は、「神社なのにキヤバレー紛まがいの宣伝だ」それを家族や知人に話す「そんな訳ないだろ」と話題になる本当なのか山海神社に見学にやつてくるしかしキヤバレーの宣伝はしない厳かと癒しの場を提供する「なんだか、ホツとするな」と人々は思う大盛況となり夢寐の信仰心が増えるめでたし、めでたし。

「ということ…人間はギャップがあると惹かれることがあるから…」とのこと。

喧嘩がメチャクチャ強い不良で常に喧嘩しているという人が学校の帰り道に雨に濡れた子猫に牛乳を上げたりしているのを見ると「意外に良い奴だな」となる。

普段、眼鏡を掛けている地味で大人しい女性が眼鏡をやめてコンタクトレンズにした時に眼がクリクリの可愛い女性に変容する。こんな感じでギャップというのは心の仰天であるから記憶に残りやすいのだ。

「アホか！！キヤバレーの神社に誰が好き好んで来るのよー！いい、神社は子供達が楽しめるように安全に配慮してあるのよー…そここそんな噂が立つたら益々ダメじゃないー！」

昔の子供達は神社に集まつては様々な遊びをしてきた。鬼ごっこで境内を往路したり神社の御神木に手をつけて達磨さんが転んだもしたのだ。神社だからと行つて立ち入り禁止の区域にしないで子供達の成長を見守り続けてきたし、子供達も不思議と安心してイタズラができていたのだ。イタズラの度が過ぎて神主に怒られるのも教育の一貫！！

昔から神はものすごく身近な存在だった。雷や雨も神様の仕業と考えて敬われており、そうしたことが信仰心となつて土地神にチカラを与えてくれる。テルテル坊主を家の軒下に吊るしておくのも立派な信仰である。

しかし現代は、雨は上昇気流で雲となつた雨粒が落ちてくる現象だ、雷は摩擦による電子の移動であるといふことが科学的にわかつてしまつたため、そうしてしまつと今まで神秘的な現象だったモノが味気ない数式に変容してしまえば神様の信仰から離れてしまうのは、ある意味必然であろう。

「全く……最近の日本を見ていれば、まだまだ信仰は必要だと思うけどなあ」

日本人の死因のN.O.·I.は、「ガン」であるとしているがそれは、ある意味自然死の一端であると考へた時に出る答へだが自然死でないことを踏まえればN.O.·I.はガンから外れるのだ。……自然死でない死因とは何かって？

それは、あまりに単純な脳の誤作動によつて引き起こされるゝゝ

自殺くくであるつ。

社会的に自分の居場所がなくなり死の世界に思いを馳せるのは生物で言えば人間だけである。そしてこれは、現在の若者を中心に広がる負の連鎖として社会に大打撃を与えている。

「神様という…心強い味方が身近にいたから…昔は自殺が少なかつた……」

「そうそう……科学が発展して偉くなつた氣になる人や人間が神を超えたとか言つけど、まだまだ人間が未来を歩んで行くには自分で心を豊かにして現実に立ち向かつて行かないといけないのよ。その行為を助けてくれるのが自分の心の中にいる小さな神様の存在よう一む、どうしよう?」

「要は神社の教えをどのように伝えるかなんだよな…所謂、布教つて奴だな」

「そうだね…布教と言えばキリスト教が出てくるわね…………よく考えるとザビエルって凄くない!？」

フランシスコ・ザビエル…1549年に日本で初めてキリスト教を伝えたとされる人物。因みに日本に来て衝撃を受けたことは同性愛が当時の日本で公然と行われていたこと(キリスト教では重罪)。

「あいつらどんな感じでやつてたんだ!…? 鎌、検索!…!」

検索…山海家の歩く辞典となつてゐる鎌螺が今まで手に入れた知識を披露する時の掛け言葉。鎌螺に聞けば大抵の情報が手に入るが本人曰く「瞬間記憶能力」は持つていないこと。訓練で記憶力を上げたらしい。

「ザビエル達は、廃寺となつていた大道寺を拠点として布教していった…一日に一回、説教して信者を集めたらしい…約二ヶ月で五百人位まで信者が増えた…」

鎌螺のデータバンクにザビエルの情報があつたらしく眼を上に向けて文章を読んじた。しかし、その情報には我々の現状を開拓できるような作戦は含まれていない。

「私達でその説教をやってみる?」

「無理だろ!絶対来ないと思うし誰が説教するんだ!…まさかこのメンバーでやる訳にもいかんだろう!…」

「そ、そうだね…」

確かにこちらの戦力だと蛇とまだ修行中の巫女アルバイター一人では宣伝力に欠ける。

結局、歴史を参考にしてみたが現在の人々には到底施すことができないうことが分かつてしまふに留まつたが以外な所から案というのは閃いたのだった。

今回の大発見、雨螺は日本史の知識が人並みにある(農民の生活に共感をして授業中に号泣したからか?)

マイズ3、檻螺のバイト（前書き）

終戦記念日ですね……

物置部屋を掃除していたら私の曾祖父の「陸軍士官学校卒業証書」が出てきました。

祖父は戦争には行つていなかつたですが、祖父の兄が衛生兵として参加していたそ�です。

もひづくなりましたが生前に戦争の悲惨を生きしづ話してくれたのを想い出します。

平和に暮らしていくことに感謝しないといけませんね！

デイズ3、雨螺のバイト

アルバイトといつのは結構大変な仕事だ。

勿論、中学を卒業しただけの山海姉妹には安定した収入が得られることはないので毎日職種の異なるアルバイトをしていくことが必要となる。

アルバイトとアルバイトの間には空いた時間があるため山海神社にある古めかしい書庫をあさっては、巫女になるための勉強も欠かすこともない。

そんな姉妹であるが別に中がそれ程良い訳ではない。

前回の話で雨螺は若干の文系で鎌螺はバリバリの理系であるから話の根幹が多少なりともズレる。

気が合つたら一緒に居るし、合わない時はお互いにバラバラの事をしている。

夢寐曰く「これが永く人と付き合つていくコツだ」らしい。

まあ、そんな考えに賛同しているため姉妹でバラバラのバイト先で働いている。

そんな事により現在、雨螺は夜刀ノ町にあるコンビニ店「カンナ」で働いている。

コンビニ店「カンナ」…創業者が砂鉄を採集して砂と鉄を分ける仕事をから始まつた店。

今では軍手のツブツブから車まで手掛けているため便利屋と云われている。カスミ

「…あ、もしもし坪倉様でしょつか?…はい、わたくしはコンビニ
「カンナ」の者なのですが坪倉様がご予約されました書籍が届きましたので何時頃来れますか?……はい、明日の午後四時半ですね!かしこまりました。お待ちしております」

雨螺が丁寧な口調で仕事に励んでいた。

この店での主な仕事は料金を支払うレジ係なのだが今月は大人気シリーズの最新四巻が発売されるのでその対応に追われていた。

因みにその大人気シリーズというのは小説でタイトルは「細菌ケルスの冒険!」

細菌ケルスの冒険!…巷では大人気のファンタジー小説。世界を支配しようと企むウイルス団とその企みを阻止するために立ち上がった細菌達との戦いを描いた作品。

現在第四巻「インフルエンザと風邪」がリリースされた。

因みにぬいぐるみが発売されており、一番人気は「大腸菌O・157」。

その書籍を予約した人に一軒一軒電話をかけて入荷しましたの連絡をする。

予約特典でインフルエンザウイルスのタオルケットが付いてくる。

電話を予約数の二十人全て掛け終わり、ホッと一息を入れるが「カンナ」の店長は人遣いが荒い。

「おいバイト!!それが終わったら品物の補充をしておけよ!品物は段ボールに入つて冷蔵室に入れてあるから」

「あ、はい!!」

カンナの店の奥には冷凍機能付きの倉庫があり、それぞれ仕入れた飲料水や食べ物等を保存しており店内の品物の様子で補充したりするのだ。

階段を少し下った所で巨大な冷蔵庫のような扉を開けると勝手に閉まらないように木の棒をつつき棒として止める。

開けるとまず飛び込んで来るのはかなり大きめのファンだ。そこからヒヤーとした空気が流れ込んでくる。

サスペンスなら殺しのトリックに使われそうな場所だ。

バ力なこと考えてないで仕事と仕事。

雨螺は一、二回一の腕辺りを擦りながら目的となるスポーツ飲料の箱を開けて倉庫に備えてあるカゴに必要な分だけ入れる。

今の時期は、中学や高校で体育局の部活で新人戦が行われているので軽食としておにぎりやスポーツ飲料がよく売れている。

ウイダーナゼリーも同じく。

スポーツ飲料は必要な分だけ取り出してラ段ボールは、すっかり空っぽになつた。

空っぽになつた段ボールは、ゴミとして町の収集所に出すので最後の人は、誰でも段ボールを置んで出しやすいようにするのだ。

雨螺の頭の豆電球がピカツと光つた。

錆付いているかと思われた彼女の電球が勢いよく付いた為、天気が少しだけ降り傾向になる。

店番をしていた店長は、今にも雨が降り出しそうな天気を確認して店先にビニール傘を商品として配置し始める程。

倉庫にいた雨螺は、畳んだ段ボールをもつ一度箱状態に戻して、
繁縝と外装と中を確認する。

時には上下左右に振つてみたり、頭を入れてみたりと思い付く限りの情報収集を実行した。

流石に頭がスッポリ入るサイズではないので眉毛の上辺りで止まる（どつかの民族の衣装みたいな姿に頭が成る）

そうしてからの結論…（五分間の詩吟）

「これだわ…これを使うのよ…今、最高に頭が冴えておる…」

冷たい冷蔵室のはずなのだが思考が次々と数珠つなぎになつていき興奮が止まらない。

出来ればこの場で大声を出して壁をバンバンと叩きたい（喜びを身体で表現するタイプ）

そんな消化不良なエネルギーを少しでも消費する為に動作を大袈裟に大きくしていき、バタンと段ボールを片手に冷蔵庫を出ていく。

何でもできる気がする…！そんな思いで階段をスキップに近い足取りで登つていき、商品が立ち並ぶ場所へ移動した。

（「Jのことを夢寐や鎌螺に伝えないと…！」）

外の天気は小雨がパラパラと降つている程度で移動には支障はない

い。

そのままアルバイトの制服を着こなしたまま自動ドアを開けて帰路に着こいつと歩み始めるが……

「何処に行くんだ！－まだ勤務時間が終わっていないぞバイト！－」

店長が万引きGメンばかりの俊敏な足裁きで鼻歌混じりの雨螺を取つ捕まえる。

肩を叩かれてから我に返つた雨螺の顔が徐々に青白く変化して冷や汗がだらだらと滴り落ちる。

「黙つて帰る程、俺の部下は嫌か？… だつたら首にしても良いんだぜ！勿論、売れ残りの商品を譲渡する事もナシだ！－」

売れ残りの商品が貰えない 明日から食糧難が勃発！－

「そ、それだけは……」

蚊が飛んで行つたかのようなか細い声で雨螺が言つ。

「だつたら奴隸の如く働くんだな！ 働かざる者食うべからずだ！」

そのまま制服の襟元をガシッと掴んで店長がバイト先へと雨螺を引きずり込んで行った。

「『めんなさい』…つい、出来心なんです

田を涙でいっぱいにしながら雨螺が断腸の思いで言つた一言。 とりあえず、拳骨一発で許されました。

教訓

「働くがやる者食つべからず」

デイズ4、工夫が大事（前書き）

先日、実家近くの祭りにスタッフとして参加してきました。

焼き鳥を鉄板の上で焼いていたので汗が大変！！

デイズ4、工夫が大事

本日のアルバイトは午後三時に終わりを告げた。

わざとではないにしろ一回サボりかけてしまったのだから馬車馬の如く働かされたのだ。

確かに拳骨で精算したと店長は言つたのだが後々の対応が……

「店内の掃除……」

「はい……」

「それが終わつたらトイレの掃除もしろ……おい、髪の毛が落ちてゐるぞ……」

「すいません……ぎやつ……」

焦つた雨螺が躊躇つてスナック菓子のコーナーへ突つ込んでしまいあと片付けが増える。

「おい……なんだかんだで補充もまだだぞ……」

「あつ忘れてた……ぎやつ……」

そして惣菜コーナーに（以下同文）

いつもの数倍疲れた雨螺がトボトボと夢寐と鎌螺が待つてゐるアパートへ帰ろうと歩みを進めていた。

「おのれ！あの店長め……絶対に前世は、非道の人を人間と思

わない……ほりアレ……とにかく悪い人よ（思ひ付かず）」

まあ半分は自分のせいなのだが……

小雨だった雨は軽く降つただけで今は、すっきりと晴れていた。
現在は四月の下旬であるから雨期の前兆にしても早い。

戦利品のスポーツ飲料の段ボールを片手に持つて雨螺旋は行く。

目的の品は手に入れたから長居は無用と言わんばかり早足で本部へ戻る。

水溜まりがあらうが歩みは止めない。

佐々木さん家の犬ベッカムが吠えようが関係なく早足で通り過ぎる。

佐々木さん家の犬ベッカム……佐々木さんの奥さんが大のベッカムファンで名付けられた哀れな犬。

秋田犬だが頭の部分は先月、金髪に染め上げられてしまつた。今思えばこの頃から凶暴になつた。

彼女は、これである物を作るという使命に燃えているのでどんな障壁があるうと前進を止めない。

それは正に男塾名物「直進行軍」を彷彿とさせる動きだ。

もはやどんな障害も叩き壊して進むことであらう。

ゴミ捨て場

そんなモノに構つてゐる場合ではないと通り過ぎる。

今日も資源「」の日

関係ない私はこれから偉大なる仕事を……

修繕に役に立ちそうな古着が。

…………くうう！ 一円引き返す。

まだまだ使える鉛筆がコロリ。

「…………よしー！」

ガサゴソと聖戦の舞台に舞い降りて行く、そして鑑定団のよつな鋭い目付きで品定めをする雨螺。

その時の目付きは鬼気迫る感じの表情であるが…近い表情ならば近視の眼鏡を取つて新聞を見るような目付に近い。

そんな様子なもんだから……

「まま、あの人なにしてるの？」

「しつ……見ちゃいけません！」と子連れの親子に言われるがそんな言葉でへこたれていっては貧乏人を名乗れるだらうか、いや名乗れるはずがない（反語）

雨螺は大学ノートやジャポ〇力学習帳を縛つてあるビニール紐を爪でバサリと切る。

雨螺の爪……ハサミもカッターも包丁もない時に雨螺が皿口流で鍛えた爪。

伸ばせばリンクゴレベルは軽く切れる業物。

爪カッターが搭載されているのは右手なので握手をする際は左手を差し出すのが好ましい。

そして封印されていた書物群をパラパラと流し読みをしていく。
そこに余白を発見すると…

「まだ使える！！」雨に濡れているけど晴れた日に窓に貼つていれば乾く！…」

と言つて辺りをキョロキョロ見渡すと自分の所有物とするべくノートの束を手に持つ。

鉛筆も胸ポケットにしまつ。

(鉛筆削り機が問題なのよ…。)れ位の長さなら私の爪で…)

鋭利な爪で鉛筆の先端を削り、黒鉛が綺麗な円錐となるのをうつとつと見る。

丁度、家計簿の道具類が切れてきたのでこれは嬉しい収穫だ。
雨に濡れてふにゃふにゃになったノートと鉛筆を抱えて満足そうに鼻歌を奏でながら立ち去る。そして一百メートル程、道を進んで思い出す。

「はつ！一段ボール忘れた！」

再びゴリラ捨て場へ直行した。

* * * * *

山海家の拠点となつてゐるアパートに雨螺と鎌螺、夢寐が帰宅したのは午後五時を回つていた。

「……ところ訳でこの段ボールを使って日安箱を作るのよ……」

雨螺のハツラツとした顔に一日を一生懸命過いした鎌螺と夢寐のテンションでは、かなりの開きがあった。

夢寐がこんな成り（蛇）でも土地神なのだから決して暇ではない。夜刀ノ町の気の流れや氏子の様子に気を配り、常に情報収集を欠かさない（主にトカゲや蛙が情報を仕入れてくれる）

土地神業界では「調律」と呼ばれている。

方や鎌螺は、夜刀ノ町のレストランでウェイターのバイトをしていた為、足が痛いらしく何度もふくらはぎを揉んでほぐす。

「…日安箱？」

「そう！…この箱に夜刀ノ町の人達の悩みや困ったことを紙に書いて入れて貰うのよ…！それを私達で解決するの…！」

「…また突拍子もなことと思いついたな…」こいつ
「今日から始まつたことじやないよ……」

雨螺の思い付きと/orか性格からなのか、日々一緒に生活して驚かされることが多々あった。

雨螺は、妹の雨螺とは違はある意味での「天才的な集中力」を持

つていた。

鎌螺は性格的に飽きるのが早く、次から次へと遊びの対象を変え
ていた。

だからこそ広い知識が無意識に身についたのだ。

しかし姉の雨螺は、一度「面白」…という感情が浮かぶとト
コトンのめり込むタイプでその状態になつた時は、耳元で話しあげ
ても聞こえない程の集中をみせる。

|雨螺と鎌螺が保育園時代が最たるもので……

ある日、アリを殺すことに興味を覚えた雨螺は、ドンドンのめり
込んでいた。

夜刀ノ町のアリといつアリを殲滅しにかかりてしまった。

保育園の先生と夢寐が止めに入らなければ……今でも寒気がする。
そんな奴だから一度言ひだしたら、納得するまで後には引かない
だろう。

鎌螺と夢寐は互いに眼を合わせて溜息を吐く。

「ねえ！…良いアイデアだと思わない！？人を助ければ神社の復興
にも貢献できるし…！」

「それは良いけど……悩み事を書く為の用紙はどこにあるの？

鎌螺からもつともな意見を言い渡された。

「…………か、考えてなかつた……」

紙とて満足に手に入れるのが大変な山海家では死活問題である。先程の大学ノートの空白を探していた事から分かる通りです。

「雨の考あおえも良いと思おもつが……一回で採用にはならないな……さて、夕飯でも食おうぜ! 今日の食料調達は鎌かまだつたな」

「うん……今田はカレーライスだから豪勢だよ」

レストランで余分に作り過ぎてしまったカレー鍋をちやぶ台の上に置いた。

その傍らで雨螺は一人で落ち込んでいた。

山海家語録

「使える工夫がある限りゴリではない」 b y 雨螺

デイズ5、朝の光景（前書き）

今日はアリが巣の開墾するためにせつせと土を掻き出していくのを見ました。

いつかアリを主人公にした作品を書いてみたいです。

こんな事ばっかやつてるから実の兄に「お前.. よくわからん..」つて面と向かって言われるんだよ。

デイズ5、朝の光景

山海家の朝は早い。

夜の電気代をなるべく抑えるのと無駄なエネルギー消費を防ぐ行動の賜物が早起きを実現していた。

夜の時間に電気が付いている等はかなり珍しいらしく灯りが付いたこの部屋を見た者は、幸せになるというジンクスがある程である。雨螺と鎌螺、蛇神の夢寐はこのことには気付いていない。

せいぜい、噂好きの地域のおばちゃんがジンクスを信じきる無垢な学生が話の種にするだけであり、山海家にとつての利益と信仰心には一切関与していないのが悔しい。

朝焼けが綺麗に窓から差し込んだのを確認して継ぎ接ぎだらけのボロのカーテンを開けるが……

パキッ ガシャン!!

不吉な音を立ててカーテンレールが力無く畳の上に傾きながら落ちてしまった。

「…………」

「…………」

「…………」

三者が落ちぶれたカーテンレールを囲みながら嫌な空気がのしかかる。

当然、カーテンレールを最も落とすことが困難な者から口を開いた。

「…おい…どうすんだよ！」

「だ、大丈夫よ…バイトが終わつたら直すから…」

「雨螺は…力任せよくない…」

「うつさいわね…ガタが來ていたから丁度良いの…！人生常にポジティブシンキング…！」

どうやら犯人は天然の雨螺だ。

何気に雨螺は手先が器用なので家にある整理棚を作つたりしてい るのも彼女だ。

天然なので失敗も多いが…

朝からとんだハプニングが起きてしまつたが、そこは伊達に蛇と一緒に長年暮らしているだけのことがあり、必要な責めが終われば 朝の支度を始める。

朝食は毎回一人で一週間のローテーションでそれぞれ準備をして いる。

今週は雨螺が当番だ。

土地神の夢寐は窓辺に這つて昇り、変温動物として通例の陽なた ぼつこを開始した時にお化けがプリントされたエプロンを着た雨螺 が思い出したように近づいてきた。

「やがてやがて夢寐、この世でふやけたノートを乾かしておいて
」

「はあ！－何で俺がそんなことを！」

「山海家の教訓は、働く者食つべからずよーー。蛇だからといってサボるのはダメ!」

「面倒いからバス」

「あつそーじやあ「ときめきキャンドゥ」はお預けねー！」

ときめきキャンディー…味ごとに色が違つ飴。飴の回りこびらめが付いてるので舐め応え抜群。

夢寐の女物

「なつ！－あるんなら先に渡せ－！給料の前借りを要求するぞ－！」

「ダメ！前借りはクセになるから絶対に渡さないわよ！仕事の世界はそんなに甘いものじゃないわ」

「なんだとおーーー！俺はこれでも神様だぞーーー！」

「陽なたぼつこが必要な神様なんてありがたみがないですよーだ！」

すると壁に掛けてあるひのの裏面と面と向かって何やら口を開け

てブツブツ言つている鎌螺がいた。

壁に掛けあるCD……鏡のよつな高級な代物は入手するのが困難だつたので「ミミ捨て場にあつたCDで代用している。ちなみに外に出せばカラス除けになる優れ物。

「やつぱつ出来る…またか…」

「どりしたの鎌螺?…あ、ひょりとじて口内炎ができたな…」

「クンと頷く。

「最近、まともな」飯を食べていないからね…よし、今から特効薬を塗つてあげよ!」

「だ、大丈夫…自分で治すから…」

「口内炎は自力じゃ治せないから…早く」

「…………」

そして雨螺が手にしていたのは立派な玄界灘産の「粗塩」であつた。

袋に入っている粗塩を一摘要して鎌螺の口内炎へと擦り込ませる。

「ぐうううーーーーーー(声にならない)」

せりや苗は拷問や尋問にも使われており、諺である通り「傷口に塩を塗る」喰えられる程の激痛を生む物だからしづがない。

しかし山海家では、赤チンやオキシドールの類いは高級品の為、備蓄をしていない。

本当に小さい頃からケガをすれば粗塩を傷口に擦り込むのが当たり前になつたのだ。

擦り傷 粗塩

口内炎 粗塩

捻挫・打ち身 粗塩

骨折 粗塩

馬鹿の一つ覚えのようなワンパターン戦法である。 良い子は真似しないでください。

関係ない話であるが「バキ」の登場人物であるビスケット・オーバを思い出した。

ビスケット・オリバー：世界一自由な男。獄中にいながらバイクを乗り回す破天荒な性格だが妻に優しい。

皮膚に粗塩が擦り込んであるので並大抵のことでは傷がつかない。

大体、一分程この痛みに耐えることができれば次第に痛みは引いていく。

後は塩っぱいだけである。

「アルバイトしながらだから食生活が偏るのが問題ね！！」

痛みが引いてきた鎌螺の顔が今度は塩氣の塩つぱさに筋肉を一点に集中させて水分を絞り出す反射運動をしていった。

「塩つぱい……」

表情の起伏が乏しい鎌螺なのだからこの時に運動をしておかないと退化してしまうのではないかと思う。
だからちょっとだけ塩の量を増やしたのは秘密。

「そりだーー朝は簡単で早い納豆にするかーー先週タイムセールで買い溜めしておいた奴ーー！」

先週、三パックセットが五十円という破格の値段でセールをしていたので総力を挙げて購入してきた。

冷蔵庫から国産納豆「匂わ納豆」を一パック取り出して今日の朝に炊いておいた二合の「」飯を大きめの皿によそり出し、納豆と絡める。

簡単な納豆ご飯の出来上がりだ。

これを食べて本田のスタートを切る。

山海家教訓「ケガをしたら粗塩ーー！」

山海家だけの教えなので絶対に真似しないでください。

誤つて粗塩が傷口にかかってしまったら流水で洗い流し、速やかに医師の指示を受けてください。

デイズ6、やせぬけじ（前書き）

父の部屋が凄いことになつてきました。

元々、バイクや軍事関係のマニアでよくそれ関係の本やモデルガンを買つてきているのは知っていましたが……

ある日入つたら「ガスマスク」なるモノが買つてありビックリしました。

家族でバラバラの趣味を持つていると世界が広がります。

デイズ6、わざめいじ

午前九時

雨螺と鎌螺はそれぞれのアルバイト先に働きに行つたようだ。

雨螺は最も体力の使う引っ越しのバイトへ。

鎌螺は膨大な書庫の整理をしなければならない懐刀図書館のバイトへそれぞれ赴いて行つた。

一柱、境内で大学ノートを天日干しにしながら時折ページを尻尾で器用にちょいちょいと捲りながらまんべんなく乾かす。

一柱……神様の単位。その昔、家の大黒柱に神様が宿ると信じられていた為こう数える。

昨日雨螺が即席で作った段ボール日安箱は、山海神社の社務所に一応入れて置いた。

社務所……神社を管理する場所。

その目の前には少し大きめの神池がある。

所々に風情ある蓮の葉がブカブカ浮いているのが見える。

夢寐は思い立つたようにスルスルと白い身体を這つて移動し池の側で声を出した。

「ケイはいるか！？いるなら顔を出せー！」

朝方だが山海神社はひつそりとして人間などいないので夢寐が話

してもあまり問題ではないだろ？

田撃されてしまえばそれこそ大騒ぎになってしまつ。

その声に反応した存在が山海神社の神池の底から眼をギラギラさせながら浮上してきた。

それは全身緑色の生物で蓮の上にゲコッと飛び乗った。

「これはこれは夢寐神様！ カエルのケイで『ぞこますゲロ』

カエルのケイ……長生きしたカエルが人語を介すよつになった存在。夢寐に数年前から弟子入りして立派な土地神になるように田頃から修行をしている。

土地神見習い。

「『』用件は何ゲ『か？』

「ああ、ちょっと『わさめき』として夜刀ノ町で広めて欲しいことがある…」

わさめきこと：神が出でた噂話。信託やお告げが正しい表現だが夢寐は、堅苦しいのが嫌いなので前者を使つている。

「わかつたゲロ！…少し待つてください」

再びポチャンと池に飛び込んで底においてある木製の板と筆を持つてきた。

わさめきこと専用の板でこれに神文字を反転させて書き込んでス

タンブの要領で町内の至る所に押しつければ自然と噂話が広がる優れ物。

「内容はそつだな…」「山海神社で悩み事を田安箱に入れれば解決するらしいよーー！」といった感じでまとめてくれ

噂話なので断定にせず曖昧を意味する語尾にするのがミソ。

カエルのケイは筆でサラサラと神文字を書いていたがある単語の部分で筆が止まってしまった。

「すみませんゲ口」「田安箱」の神文字を忘れてしまったゲ口

「勉強不足だな！」「だろ……しつかり修行しないと土地なんて任せて貰えないぞ！ちゃんと神文字だけじゃなくて陰陽五行の修行もしてゐんだろうな？」

「ゲロゲロ…まだ水氣しか修得していないゲ口」

「土地神にとつては陰陽五行は基本中の基本だぜ！水氣、火氣、木氣、土氣、金氣じんきが土地の調律に必要なスキルだから復習しておけよ！」

陰陽五行…陰陽道でもお馴染みの代物で土地神を目指すなら全て修得しておかないといけない。

いわば、土地神にとつての義務教育みたいな感じ。

水氣…水を操る術。

火氣…火を操る術

木氣…樹木を操る術

土氣…大地を操る術

金氣…金属を操る術

「まあ…信仰心がなくなつて落ちぶれた俺が言えるタチではないがな…もうこのご時世だ土地神なんて職業を目指すのをやめて自由に生きたらどうだ?」

「まあ…信頼性がいいことが証明されてしまい人間達がいつまでも神社に参拝するはずがないから、何時土地神業が廃業するか分からぬからこそその言葉だった。」

「いえ!土地神はオイラの夢みたいだゲロ!…人間が好きだから目指しているんだゲロ」

土地神は他の神とは違ひ土地の縁が深いから、必然的に人間達との関わりも深くなる。

「へえ!まだ水氣しか使えない能ナシがエリートの土地神になれつかよ!…天地がひっくり返つたって無理な話だぜ」

「能ナシならその分、鍛練を積めば良いんだゲロ!…それでは、さめき」とを広めていくゲロ!…」

そう言つと木の板を背中に乗せて紐で落ちないように縛る。

そして、神池の蓮から蓮へ移動し地面に降り立つとピヨンピヨンと跳躍しながら鎮守の森の中へ消えて行つた。

鎮守の森…神社の回りを囲んでいる森林。

自然に対する畏れから神は派生したのでこいつた所に建てられることが多い。

カエルの土地神見舞いを見送つた夢寐は、軽く溜息を吐いた。

「何で俺の周りには、前向きに生きる奴が多いんだ（誇張）？…」
「…俺も前に進まないと格好悪いじゃねーか…」

五月の大型連休である「ゴールデンウィーク」を翌週に控えた水曜日のことだった。

デイズ7、鬼灯高校（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです……

足に血豆ができて歩くと痛いです。
取り敢えず冷やして経過を見る…

デイズフ、鬼灯高校

夢寐達が顔面を見事に蒼白し信仰心を取り戻すべくあくせく動いているが…

世間一般では、今回の「神様不在の証明」という事実については何も感慨がなかつたに等しかつた。

レベル的には話題がなくなつた時の繋ぎみたいな感じであらう。

「……やっぱりサイコーだよね」

「うん……」

話題が消沈

「…とにかく神様がいない」とが証明されたらしこよーーー。」

「へえーーー! そ、うなんだ」

「ワタシもよく分からぬいけど数学的に証明されたらしこよーーー。」

「ふーん(興味なし)、やうやう昨日の特番見た?」

……と言つた風に理系離れが叫ばれる現代においては、それほど大した話題でない。

元より興味がないので（新聞でもチョコンとしか載つていなかつたのも一因）数週間経つてしまえばエビングハウス忘却曲線の法則

に従つて忘れていくのであります。

今ニュースや新聞を騒がせている話題と言えば…

アイドル歌手「雪雹 瑞希」が映画の主演に抜擢。

謎の探偵「アイスバーン」が十年ぶりに活動再開。

この一つである。

* * * * *

県立鬼灯高等学校（二学年七組教室）

五月の大型連休である「ゴールデンウィーク」が間近に迫っていることもあってか教室の中の空気は良く言えば「のほほん」、悪く言えば「弛んでいる」の状態だった。

みんながこの休日に何をするかまたは、一緒に何をしようかの相談を彼方や此方で熱心に会話をしている。

そんな中で一人の目つきの悪い男子高校生が机に向かって新聞に目を通していた。

「アレッ！ 修^{しゅう}久しぶりじゃねーか！ 始業式以来だな」

坊主頭のいかにも球児ですといわんばかりの青年が新聞を読んでいる人に話しかけた。

「ああ…たまには顔見せないと担任がつるさーからな…毎朝、電話が鳴りっぱなつしでノイローゼになりそうだ！」

この青年の名前は「黒道」
修羅」といふ。

卷之二

鬼灯高校一年生であるがあまり学校に来る事がない。しかし学年トップの成績で通過している為、落ちこぼれている訳でない。

「それよりも何で今朝の新聞を読んでんだ!? オレはもう読んだぜーーー！」

「ひだり」の題材は、マニア漫画として人気がある

「うつ……失礼な今日の番組予定も曰を通したぞ……」

「似たようなモンだろ……朝見てる暇がなかつたから学校に持つてきただけだ……昨日起こつたストーカー事件の犯人がまだ逃走中か……」

黒道はサイズが微妙に合つてない眼鏡を取り、制服のワイヤーシャツの裾でレンズを拭いた。

そして探す。数日前から奴の動きを知るため。

ペラペラと新聞をめくつていきスポーツ欄を通りすぎた辺りであらうか……あれに関する記事を見つけた。

一目見ると黒道は、口を大きく耳まで裂けるかのような笑顔を浮かべ立ち上った。

「まじか…ついに動きだしゃがつた…！アイスバーンが…」

黒道が食い入るように見てくる記事というのは…

>>謎の探偵
アイスバーンからの予告<<

この国を担う大企業「一菱」の全てをアイスバーンが今夜調べに入るという内容だった。

謎の探偵 アイスバーン… 国籍不明、年齢不明、性別不明の謎多き人物。個人で動く事が多いため依頼を受ければどんな任務も完遂する圧倒的な頭脳と行動力、権限を持つている。

二十年前に活動がピタリと止まったが再び動きだしたようだ。

「今夜か…」

「ん、どうしたんだ修！？」

「ば～か！帰んだよ…！」んな一大事に授業受けてられつか…！」

そう言つと新聞を折り畳んで鞄の中にしまつ。

黒道は家に教科書を持つて帰らない派で始業式に購入した（された）教科書をそのままの形で保管していた。

「帰るつたつて…もう先生来ちゃうぜ…！」

「それはお前が適当に言つておいてくれ…じゃつ…！」

敬礼擬いのポーズで手の平をヒラヒラさせながら黒道は黒板側の扉から出て行こうと手を掛けるが…

ガラガラ…

一人でに扉が開いて一瞬だがビクッと驚く。

「あつ…！」

「えつ」

身構える黒道の田の前にいたのは古典の先生であり担任の先生「寺澤」だった。

身長は小さい方であるが常に笑顔でポジティブに生きるパワフルな女性の先生だ。

寺澤先生は満面な笑顔でニコッと笑うと学校中に響くのではない
かと心配するような大声で叫んだ。

「黒道くんだあ———やああつと来ててくれたんだねーーー！」

生徒に関しては本当の愛息子、愛娘に向けるような愛情で接していく先生なので始業式以降初めて登校してきた黒道に会えて嬉しいらしい。

(だああああーー面倒くさいのに見つかったーーオレが一番苦手なタイプなんだよ)

七組のあまりの騒ぎに他の組の生徒が廊下を覗き込むように扉から黙つて見ている。

「みんなあーーー黒道くんが来たよーーー！」

今度は教室に入つてクラスの連中に黒道が登校してきたことを高らかに報告する担任。

その場の空気に押し潰されそうになりながらも黒道はお腹に手を当てる…

「あーイタイタ！！これはかなり痛い！すんません頭痛が激しいので早退します！！はい、さよなら（棒読み）－－！」

「ふえつ……ビリこくの…お腹押さえながら頭痛つて…黒道くううん！！」

今度は断末魔に似た叫びが鬼灯高校に響いたようだ。

デイズ8、アイスバーン（前書き）

足の血豆を病院で診て貰いました。

医「平井さん…これは穴を空けて血を抜いちゃいましょう…」

平「えつ…ちよつ」

注射の針で刺されました…痛くなかつたですが精神的にきつかった…
抜いた後にガーゼで力強くゴシゴシしないでよ…地味な鈍痛がくる
んた（泣）

デイズ8、アイスバーン

ハッカー：コンピュータやインターネットにおいての問題を最も労力の少ない方法で解決する術を知っている者。

そのためには卓越した知識力が必要になるため一流のハッカーまでに幾つかのランク（能力によって異なる）を経ていく必要がある。

インターネット上の知識を悪に転じさせた時の呼び名は「クラッカー」であるが広義の意味でメディアは「ハッカー」と表現することが多い。

謎の探偵「アイスバーン」もインターネットやコンピュータにおいて並外れた能力を持つている事がわかつていて「…ありとあらゆる知識を有していたアイスバーンにとつては数ある情報の一つとか認識していられないだろう。

話がアイスバーン寄りになってしまったが鬼灯高校に通う黒道も似たような技術を独学で手に入れていた。

彼が生まれた時代には、アイスバーンの活動は休止状態で生で知ることはない…しかし、世間を騒がせたアイスバーンの存在が人々の間でそう簡単に無くなることがなく一種のヒーローとして紹介されている。

テレビ洗脳時代と云つても過言ではない程、私達にとつてテレビというのは非常に身近な存在である。

そんな彼もテレビから大部分の情報収集に使用しているので自然

と興味は湧く。

丁度、中学生の年代という思春期の始まりに本物の天才を見た黒道にとつては、正に革命とも云つべき位の影響をアイスバーンから受けたのだ。

思春期に本物の天才を見た人間は、かなり強い。

彼はのめり込むようにプログラムの知識から近代科学の最先端までを学んでいく。

学ぶという表現よりも頭に叩き込んだという表現の方が近しい気がする。

それは善でもなければ悪でもない…ただ単純な探求に毎晩陶酔していた。

ここまで頭に叩き込んでも未だに全容の見えないアイスバーンは、彼にとつて終生の目標であると同時に倒すべき不滅の敵となつている。

善でも惡でもないハッカーの卵である黒道は、自らを「アメリカの俗語から「ギーク（卓越した知識を有する者）」と名乗っている。非常に傲慢なネームであるがここまで嘘でも良いからハッタリをかましてやらないと一生、アイスバーンに勝つのは無理だと感じた為だった。

* * * * *

黒道はサイズの合わない眼鏡を左手で調節しながら夜刀ノ町の中を歩いていた。

真っ直ぐと家に帰る訳でもなく特に目的地がないよつてランダムウォークを続いている。

「参ったな……今日は姉貴が久々の休みだつたから学校に来たのだが……こんな面白い事が起るなんて知らなかつたぜ」

黒道は六つ上の実の姉と一人暮らしをしている。

あまりに姉の性格がアレなので黒道は好んで接觸するのは極力避けているのが現状であつた。

（こ）のまま帰るとつるさこからな……一応このパソコンでもハッキング出来るから何処かで構築しながら時間でも潰すかな？）

黒道はポケットから・ iPodを取り出して、イヤホンを耳に装着する。

曲は大ファンの「MISHIA^{ミシヤ}」の代表曲だ。

MISHIA…アイドル兼女優。トップアイドルの雪電瑞希のライバルとしての構図でお互い切磋琢磨している。（）令嬢のような容姿。

雪電瑞希…トップアイドル兼女優。男勝りな性格で間違つた事を言つていると確信した場合は、大御所にもはつきりと物を言つて、MISHIAのライバル。

音楽を聴きながら身を隠すのに最適な場所がないかを物色する。

生まれ付き田付きが悪いのでここに警察官がいたら間違ひなく職務質問やら補導の対象になるであろうが幸い、付近にそんな人物が

いないので安心だ（ ？ ）

「山海神社！…懐かしいなラジオ体操で普通つてたっけ」

ふとした通りを歩いていると山海神社の名称が彫られた鳥居が目に付いた。

小学生の時に夏休みの宿題で不思議なに姉貴に連れて行かれた場所だ。

そういえば皆勤すればお菓子の詰め合わせが手に入る特典があつたから姉貴に連れて行かれたんだっけ……

黒道は山海神社の鳥居をくぐり抜けて拝殿の脇に隠れるように腰掛けた。

拝殿……人々が普段参拝する場所。賽銭箱があるのもいい。

（取り敢えず一菱の監視システムに潜り込めば良いかな…予告が新聞にあつたことを踏まえるなら監視システムも厳重にしてあるだろうが関係ないぜ！）

黒道はブラインドタッチの凄まじいスピードでキーボードからハッキング用のデータを構築していった。画面に流れるように窓が幾重にも重なり一菱会社と警察関係のメインとなるコンピュータのデータを捲す。

初めての一社同時のハックだがアイスバーンの能力には遠く及ばないだろう。彼（彼女？）の全盛期のハッキング能力はとんでもないクラスであつたからだ。

アイスバーンは欲しいと思つた情報や確証が喻国家機密であつともパスワードを解読してしまつし、同時に十社のコンピュータを相手にしても勝利してしまつ位の実力を持つていたとされてゐる。

半分は都市伝説関係の番組や本、雑誌に載つてゐた情報なのでほとんどが誇張してゐるかガセの線が濃厚である。

だが、火のないところに煙は立たぬという諺ことわざがあるから全てを否定することもしない。

今夜…予告といふが新聞に記載されている記事が正しければアイスバーンは何らかの形で一菱会社に侵入することだらう。出来ませであろうがハッキングという危険な方法で見てみる価値は十分にある。

おや… seaarchに些か(こちとか)時間がかかっているようだ。

デイズ9、ぶつきらばつ（前書き）

実家で飼っている鶏骨鶏の爪がかなり伸びてきました。
バビルサ（豚の仲間で角が変に伸びた種）のように胴体を貫かない
か心配です。

鶏骨鶏：白い鶏。卵が高級品らしいが作者の家にはオスしかいない
為、卵入手不可。

デイス9、ぶつかりまつ

「ふう〜、やっぱりネットも警備が厳しくなってるか……でも大体は把握させて貰つたゾ！！」

黒道は得意氣に笑みを浮かべてパソコンの画面を食い入るよつこ見つめていた。

アイスバーンがコンピュータに造詣が深いことは周知の事実だ。警備が厳重になるのは頷ける。

たが… 一つ腑に落ちない事と無理矢理あげるとすれば、予告くであろう。

アイスバーンは、過去の事例から推測すると極力「リスク」を回避する手段で探偵業や企業の不正をやってのけていた。

しかし、今回は何故「注目を浴びるところリスク」を背負つてまで予告をしたのかが解らなかつた。

「復活したことを世の中に誇示すると仮定すれば辻褄が合つが……どうもこれだけではないような気がしてならねえ…」

自分の復活の誇示だけではない……つまり他に陰となる目的が存在しているのか？

警察のファイアウォールを突破した辺りで黒道は、先程まで流れるように打ち込んでいたキーボードから手を放して考える。

「アイスバーンの目的は一体?……」

「あいす…ぱーん？それがどうかしたの？」

全く新聞を読んでないのかよ…！情報飽和時代になんて奴だ！と黒道が直感でイラ付いた。

「今夜一菱会社に侵入するらしくんだよ…！新聞を読んで…」

アレ…？ちょっと待て！？

俺は一人でここまで来たよな…学校の先生や友人、その他を含めても追いかけてくるのはいないはず。

黒道はサイズのあつていらない眼鏡を直しつつ隣の声をした方へ静かに向いた。

「何か凄いことになつてるんだね…！…それってパソコンでしょ！私もアルバイトでやらされるんだけね…もづ、ちんぷんかんぷん！」

髪の切り方を知らないのか前髪が乱雑に切られた同年代くらいの女性が興味津々そうに黒道のパソコン画面を眺めていた。

「だ、誰だお前！？」

髪ぱつつの女性から距離をおくように上半身だけを左側に偏らせる。

「おつと紹介が遅れたね…！けど…他人に名前を訊く時は、まず自分から名乗らないとイカンぞ少年…！」

少年…これでもクラスの中でも背の高い方なのだが（あんまし行つ

たことがないが) … つーか何なんだコイツ? 何でこんなに馴れ馴れしいんだ?

それでも社交辞令の一貫として名前だけでも名乗つておくれと云ふことをした。

「……黒道、修隕だ」

「おお! … 黒道君か初めてましてー私は、この山海神社の巫女(修行)をしてくる山海雨螺ですーー!」

巫女……? そんな胡散臭い仕事をしているのかよ…

黒道はあからさまに怪訝そうな顔をしてジャージ姿の雨螺を見る。

「…………ハツ! … ダメだよー!」のジャージはまだ使つんだからあげられなによーー!」

物ごいか何かと間違えられたらしげ……それに、かなり要らないのだが…

「それにしてもアイタタ… やつぱー 一人でタンスはきつかったかな!」

「……? 引っ越しの仕事でもしているのか?」

「もつ就職してる」とは俺よりも年上なのか? … タメだと思つていたが…

「いややバイトだよバイト! 結構キツいけど給料が良いから時々やつてんのよー 冷蔵庫運んだ時に指を挟みそうになつて焦つたもんよ

！」

その時の様子について演劇部顔負けの動きで説明する雨螺。

恐らく動かした手の範囲が冷蔵庫の大きさであろう。

「何か苦労してんだなお前も……／＼／＼

隣に座っていた雨螺がジャージの襟元をパタパタを動かしながら汗を蒸発させる行動に顔を赤らめて黒道は雨螺から顔を背けた。

パタパタと動かす隙間から白色の下着が見えてしまい思春期の黒道には刺激が強かつたようだ。

その様子に気が付いた雨螺はえへへと笑いながら

「引っ越しのバイトしてきてそのままだつたから汗臭かつたかな？
ごめん、ゴメン！」

そういう問題ではないのだが……ダメだかなりの天然と警戒心の無い子だ。

黒道は汗をかいたと言った雨螺に鞄からスポーツ飲料水を渡した。
勿論、赤面した顔を隠すように外方を向いて……

「えつー！？」

「やるから受け取れつーの……」ここに来る前に自販機で買ったけど、

「で、でも……」

「やるから受け取れつーの……」ここに来る前に自販機で買ったけど、俺には必要なくなつた！

働かないと物が貰えないと身体で覚えてしまっている雨螺は激しくオドオドしながらスポーツ飲料水を受け取った。

実はさつきから喉がカラカラだつた雨螺は、まだ空きてない蓋を外して一口飲む。

甘い……果糖が干上がりしそうな口の中で優しく包みこむように広がる。

「……それで良いんじゃねーの？俺達はまだまだガキなんだぜ！！偶たまには他人に甘えるのも必要だと思ひた……生活が大変なのも察し
が付くけど無理すんなよ」

雨螺の田の前にいる青年が立ち上がり軽く伸びをするのが見えた。

何故かとてもスローモーションに濃密に脳内に鮮明に記憶されるのを感じた。

脳がこの一時が重要だと判断したからなのだろうか……よく分からぬ。

「さあ……ゲッ……ファイアウォールから締め出されているし……」

かああーー！しまつた突破したら迅速にハックしないと締め出されてるんだつた！！

今までの苦労が水の泡となってしまい黒道の眼鏡がずり下がるよ
うに呼応してテンションが下がつた。

「あ～あダレた……もう一回やつ直しかよ…まあこっか！」

「あ、あの～…『めんなさい…』よく分からぬけど私が悪いのか
も…！」

雨螺がペットボトルを持ちながら申し訳なさそうにしているが黒道は、パソコンをシャットダウンして鞄の中にしまいながら舌をペロリと出しながら言った。

「ば～か！こっちの落ち度だよ…！俺が油断していたからだよ…！」

鞄にパソコンを入れ終わると黒道は、ゆっくりとズレた眼鏡を直す。

「久しぶりに他愛ない話しができて楽しかったぜ…！巫女修行だけ？頑張れよ」

そういうと黒道は iPodについているイヤホンを耳に付けて神社の参道から出て行こうとした。

「あ、あと飲み物ありがとう…！」

雨螺が慌て付け足すように大きめの声で言つたが iPodの音楽で聴こえなかつたらしくぐづつぱりぱりに鳥居をくぐつて行つてしまつた。

(……／＼)

なんか心臓がドキドキと早鐘を打つような感じがする。久しぶりに同年代のしかも男子と話をしたからだろ？

「この時の気持ちの整理が未だに処理できていない。まだまだ訊きたい事があったのだが…」

といつあえず帰ったらシャワーを浴びよう…。せつ思つて住んでいけるアパートに雨螺は駆けて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0850t/>

困った時の神頼み!!

2011年10月9日23時43分発行